

＜実践報告＞

学級通信「姫百合」に触発された生徒の「気づき」と「共鳴」

古川忠司 長野県飯田風越高等学校

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：学級通信「姫百合」，自問清掃，気づき，共鳴

1. はじめに

本稿は筆者が飯田風越高校で2010年から2013年までの3年間に発行した学級通信「姫百合」¹⁾を通して生徒指導に取り組んだ実践報告である。生徒はこの学級通信を毎朝読むことによって、どのような「気づき」と「共鳴」を触発されたかを明らかにすることを目的としている。

「姫百合」は筆者が担任した学級の生徒と弓道部の生徒，そして，世界史・日本史・倫理の授業を受けている生徒に配布した。筆者は2000年度に，中高人事交流によって松川中学校へ赴任し，鎌倉正之校長から「自問清掃」²⁾を学び実践する機会を得た。そして，「自問清掃」が知育に偏りがちな現代の学校教育において，徳育面を補うための有効な実践道徳であると確信するに至り，飯田風越高校においても生徒と共に「自問清掃」に取り組んでいる。「自問」とは「自らに問う」こと，つまり「何をどのように，どこまでやるかを自分に問い，よりよい方向に向かって自ら判断し，決定する」ことである。清掃は単に環境を美しくすることだけが目的ではなく，自分の心を磨くことであると捉える。すなわち清掃に対する発想をコペルニクスの的に転回して，「指示待ち人間」を脱することを目指している。筆者は船井幸雄³⁾が『百匹目の猿』（1996）において，良いと思うことを誰かが一刻も早く始め，人より早く気づいた人が自ら「先行するマイノリティ」になるべく努めるという考えに「共鳴」した。そして，個が生き集団が育つ生徒指導を実現するために，百匹の猿の中の一匹になるような一人の生徒の優れた行動を見出し，それを生徒集団に「共鳴」させていこうと考えた。その具体的方法として学級通信「姫百合」を毎朝発行し，生徒一人ひとりの「自主性・自発性」を内面から引き出すことに全力で取り組んだ。

2. 「姫百合」の発行による生徒指導

「姫百合」の題材としては，歴史的 content，哲学的 content，教育・心理的内容，看護・医療的内容，政治経済・国際的内容，生物・農業・環境的内容などのほか，最近の話題となる事柄にも触れて，生徒の関心を代わる代わる誘発すべく計画的に発行した。中でも「教育」を題材としたものを特に重視して取り上げ，生徒の「気づき」や「共鳴」を触発することに努めた。

表1. 「教育」を題材とした「姫百合」の例

No.	内 容	No.	内 容	No.	内 容
2	個性	68	ライオンの子殺し	211	小論文
4	やる気	73	褒め上手	214	環境に優しい大学
5	集中力	75	美ら海水族館	220	柳井 正氏の哲学
6	二つのお願い	80	そうなる理由がある	224	TDR, 全てはゲストのために
7	自問清掃との出会い	88	アドラー心理学	231	Fランク大学の増加
8	三猿	90	学問のすすめ	239	Mマナーとソウル・メイト
10	八木重吉「自分が燃える」	92	塩狩峠	257	モンスター・ペアレント
14	クラスのまとまり	93	アファーマティブ・アクション	258	カンニング
15	経験の科学を学ぶ	100	破戒, 大江磯吉	259	親友とは? 管鮑の交わり
16	草魂	102	プロボノパブリコ	264	幼児教育の重要性
17	常の稽古を晴れと思う	105	野村ノート	272	漢字に見る教育の本質
19	木造校舎のぬくもり	107	ハチドリの一滴	283	美術品の鑑賞の仕方
20	マインド・コントロール	115	学校耐震化	285	明朝体に寄せる日本人の心
21	等価交換の原則	116	イノベーションの行方	295	ドイツ, 本田宗一郎の名言
23	緊張回避「ブリッジング」	117	幸福とは	309	集中力アップ
27	税金の無駄使い	121	父性の復権	316	Rising Sun, 甦る日本
28	Risk on yourself	122	教育の意義と教職の役割	317	行くに小径に由らず
32	Leaderの6つの要素	126	正しい日本語	321	川口淳一郎氏に聴く
39	リフレーミング	130	ITからICTへ	323	インテル長友佑都
40	Give and Given	133	漢字の面白さ	348	スーパーホテル
41	ダブルバインド	139	奨学金返済地獄	352	担任が危惧すること
48	Kiwi-Husband 家庭内分業	140	礼儀作法とは	370	行動拡大療法
50	3人の法則, 状況の力	191	バウチャー制度導入	G40	「百匹目の猿」
60	天才は親が造る	192	プラトール	G41	「百匹目の猿」 続き
65	大学全入時代到来	194	身を以て学ぶと言うこと	G63	共鳴、4組での3年間
67	スパルタ教育	203	明確な将来への目標	G69	「百匹目の猿」 続き

「教育」を題材とする「姫百合」を読むことによって、生徒はどのような「気づき」や「共鳴」を触発されているのであろうか。生徒の自由作文を資料として考察する。

3. 清掃活動に現れた「気づき」と「共鳴」の事例

生徒は、「学級通信『姫百合』によって変わることができたこと」という題で自由作文を書くように指示されている。清掃活動という労作業の場面において自分が変わることができたという生徒の事例を4つ紹介する。先ず第1は、「姫百合」を通して「自問清掃」は自分を人間として成長させてくれることに気づいたという事例である。

「「姫百合」7号(2010)「自問清掃との出会い」を読んで、学ぶことができました。それは中学校までは、僕はあまり真面目に掃除をしませんでした。いい加減にやっていたり、たまには周りの仲間と遊んでいたりもしました。風越高校へ入学して、担任の先生から清掃の班長に指名されて、自分の心の中で「班長としてしっかり清掃をやらなければ！」と思っている時に、「姫百合」の「自問清掃との出会い」を読みました。そこに「自らの心に問い、自分を人間として成長させる清掃」とあり、これを見て清掃をすることは人間としてとても大切なことだと感じ、しっかり取り組むようになりました。班長として信頼されることも自分が変わった理由の1つです。自分が真面目に取り組んでいる姿を見て、周りの仲間も共感してくれるようになるし、その関係がみんなに広まればクラスも学年も学校も変わると思います。」(生徒K・O)

第2は、「ゴミ捨て」を自発的にするように変わったという事例である。

「自分は自発的にゴミを捨てに行くようになりました。と言っても、それができるようになったのは、3年生になった頃です。1・2年生頃までは、たまにゴミ捨てをしていましたが、それは友だちに誘われたり、先生に頼まれたりしたからで、自分から進んでではありませんでした。自分では、「ゴミがたまっていて汚いけれど、他の人がやってくれるから大丈夫」と思って、ゴミ捨ての作業から逃げていました。しかし、「自分が気づいたのに他人任せで良いのか?」「分かっているのに知らん振りをして良いのか?」と思い始めました。そんな中で、先生が始めた「他人の良い所を見て影響されたことを書く」という活動と、「姫百合」の号外67号(2010)、68号(2010)、69号(2010)でクラスメートの気持ちを紹介してくれたことがきっかけとなって、「大部分の仲間が、やり始める前は自分と同じ気持ちだった」ことを知り、気づいたら実行すべきだと思うようになりました。更に友だちの一生懸命な姿を見る中で、自発的にできるようになりました。そしてクラスのために何かできることに誇りを感じるできるようになりました。」(生徒M・S)

第3は、誰かの役に立ちたいと「黒板消し」を始めた事例である。

「僕は今までの自分だったらしなかつただろう黒板消しを、2年生になってから積極的にできるようになりました。そのきっかけは何だったか考えてみました。それは、「姫百合」323号(2011)「謙虚さこそ原動力、インテル長友佑都の知られざる戦い」を読んで、今までの「姫百合」の中で一番グッ!ときて共感できたからです。長友選手の言葉の中に、「感謝を感じられる心の余裕が、視野の広さを生み出す」とありました。まさに自分はこれだと思いました。毎週火曜日の朝、S・H君が英語のテストの配布や回収、クラス全員の点数の記録など、毎週怠ることなくやってくれています。そんなS・H君のように誰かのためになれ

ることではないか、探すようになりました。その結果、黒板消しをやろうと決心しました。最初は無心で黒板を消していましたが、授業を始める先生方から感謝の言葉をかけてもらううちに、ただやるという気持ちから誰かの役に立ちたいという気持ちに変わりました。これは、長友選手がもう一つ言っていた「人間は心で動く」だと思います。S・H君のおかげで僕は変わることができました。感謝しています。

何故自分が黒板消しをするようになったかと突き詰めて考えた時、もし自分が先生の立場であったら、授業を始める前に黒板が汚いのは、不快な気持ちになると思ったからです。2年生の時は講座長と言うこともあって、黒板を消さないと自分の責任になってしまうので、最初は嫌々やっていた所もありました。でも先生方から感謝の言葉を頂いて、次第に自分がやらなければならないという気持ちになっていきました。また古川先生が普段から口にしている「人の嫌がることはしない（望んでいることをしてあげる）」という言葉も、自分が黒板消しをするきっかけになったと思います。クラスメートの何処に刺激を受けたかを考えると、教育実習で来ていたY・K先生とのお別れの時、A・HさんとY・Sさんは、率先して「記念に色紙を書こう」とクラスに呼びかけてくれました。短い時間だったけれど、お世話になった先生に感謝の気持ちを伝えようと行動した2人は本当に凄いと思いました。自分ももっと気づいて行動ができる人間になれるように、残りの高校生活を充実したものにしたいです。」（生徒R・K）

第4は、誰も洗わない「ゴミ箱の中」をきれにするように変わったという事例である。

「私はクラスのM・S君に影響を受けました。見るたびにクラスのゴミ捨てをしてくれていて偉いなとずっと思っていたのですが、時々みんなが帰った後にもやってくれているし、学年末の教室移動の時に、誰も洗わない「ゴミ箱の中」の汚れまで1人で洗って綺麗にしてくれていました。みんなに感謝されるわけでもないし、面倒くさい仕事を、自発的に人の気づかない所で黙々とやっている姿を見て、本当に凄いと思いました。そんなM・S君を手伝いたいと思いゴミ捨てを手伝うと、M・S君は自分がやらなければいけない仕事でもないのに、私に「ありがとう！」と言ってくれました。誰もやりたがらない雑用を当たり前のように自分の仕事にし、文句1つ言わないM・S君を見て、もっと気づかない所で人の役に立てるようになりたいと思いました。その時から私は、黒板消しやゴミ捨てなどをする回数が増えました。少しの変化だけれど、この変化はとても大切なことのように思います。そのきっかけをくれたM・S君に感謝したいです。」（生徒M・K）

4. 学習活動に表れた「気づき」と「共鳴」の事例

学習活動の上に出てきた「気づき」や「共鳴」には次の5つの事例がある。先ず第1は、自主的な「ドリル」学習が定着したことを示す事例である。

「初めは毎週火曜日の朝、テストの問題プリントを英語研究室に取りに行ってテストをSHR（短学活）で行い、点数を名簿に記録して提出する仕事が、とても面倒くさく感じてやりたくありませんでした。そしてやらないと教科の先生や担任の先生から注意を受けてしま

うので、仕方なくやっているという状態でした。しかし、今は自分から積極的にやっています。何故そうなったのかと考えてみると、「姫百合」107号(2010)「ハチドリ一滴、私のできることをしているの！」を読んで、「自分がこのクラスで何ができるのか？」と考えたからです。R・K君はルーム長を、R・K君は黒板消しを、K・O君は清掃を、M・S君はゴミ捨てを、自発的に行いクラスのために貢献しています。そのことを凄いなあとと思ったら、自分も小さなことでも良いので、クラスのためになることを何かしようと思うようになりました。それが火テストを自主的に行えるようになった理由です。更にクラスみんなが、8時35分には着席してくれて、テストプリントを配布する自分もやりがいがあります。クラス全員の協力のお陰だと思います。この団結力こそが、古川忠司先生の言う「共鳴」と言うことだと感じました。」(生徒S・H)

第2は、「姫百合」を通して他の人のために力を尽くす姿勢を学んだ事例である。

「4組のみんなは、SHRの5分前の8時35分になると、みんな席に着いています。火曜日は英語の火テストがあるので、35分にはS・H君がテストプリントを配ってくれ、直ぐに始められます。それ以外の月・水・木・金は、着席を促す呼びかけがないのに35分になると、みんな自主的に席について担任の先生が来てSHRが始まるのを待っています。クラスのみんながSHRの5分前行動をできているのは、1人1人がそうしなければいけないと意識しているからだと思います。担任の先生からも「受験は団体戦」と言われているので、SHRでの5分前行動をみんなが1つになって備えたいと思います。「姫百合」224号(2011)の「全てはみんなのために」から、東日本大震災時のTDLスタッフの「全てはゲストのために」という対応に学び、他の人のために尽くすことの大切さを考えさせられました。今まで私が4組のためにできたことは思い当たらないので、これから何か1つでも4組のためにできたらと考えています。」(生徒Y・S)

第3は、SHRの5分前に着席し「姫百合」を読む習慣が身に付いた事例である。

「今回僕は「何故4組では、ここまで「5分前集合」が徹底されているか」考えてみました。まず、朝のSHRなのですが、みんなSHRが始まる5分前の8時35分には教室にいて、しかも35分のチャイムが鳴ると、先生が来なかったとしても、着席して「姫百合」を読んだり、授業の準備をしています。また、火曜日の英語ドリルの朝は、S・H君がいつもきっちり時間前に配布して始めてくれるので、クラスがビシッ！と締まります。僕はたまに朝練が長引いてしまうと、35分に遅れてしまう時があるので、以後気をつけたいなあと思いました。次に集会の時です。4組は集会でもみんな時間通りにきちんと並んでくれて、ルーム長の僕が本来なら並ばせなければいけないのですが、その手間がいらず、本当に助かっています。たまに僕が行くのが遅くなったとしても、H・T君やM・S君が先頭に立って並ばせてくれているので、いつも感謝しています。このように4組で「5分前集合」が徹底されている理由を考えてみると、やはり1人1人の意識がしっかりしているからだだと思います。他のクラスでは朝のSHRに遅れてくる人が大勢居るらしいですが、4組ではほとんどいません。これが意識の差だと思います。意識というのは、集団の中では一部の人がしっかりしているだ

けでは意味が無くまとまりません。1人1人が真剣になってこそ効果が出ます。4組では「みんなでやろう」という意識が全員に行き届く、良い雰囲気があるのだと思います。卒業までもう1年ありませんが、今後も受験に向かってみんなで団結し、みんなで頑張っていけたら、1人1人により結果が付いてくると思うので、あと少し頑張りましょう。」（生徒R・K）

第4は、「姫百合」で「行動拡大療法」を知り勉強方法を改善した事例である。

「課題をやれない人をやる気がないと考えずに、ステップが大きすぎだからスモールステップにするように指導する。「①それぞれの作業が容易だと納得できるくらいに細分化する。②時間を短く区切る。要するに最終的な課題に到達するまでに、ゆっくりと時間をかけながら、介入に耐えうる基礎を作り上げていくことが大切」という「行動拡大療法」「姫百合」370号（2012）の記事を読んで、自分の学習活動に照らし合わせて考えました。今までの私は、テスト勉強を短い時間でしていたために、やるが多すぎてやる気が出ず、全部終わらないこともよくありました。そこで「行動拡大療法」に照らし合わせて、勉強方法を改め、まずは1日に英語の復習と世界史の要点マスターを1ページだけやるようにしました。それに慣れたら、苦手な数学の問題集を1ページだけ、次は理科の問題集を1ページというように、本当に少しずつやってみることにしました。すると、毎日続くようになり、少しずつでも1ヶ月前から取り組めば、テスト前に範囲を全部復習できました。そして少しずつやることの大切さに気づきました。これを継続していけば、いつかは必ず力が付くと思います。」

（生徒M・K）

第5は、「姫百合」から苦勞しなければ何も得られないことを学んだ事例である。

「私が学習しようと思う理由は、「姫百合」317号（2011）“No pains No gains.” 「行くに小徑に由らず」にあります。まず，“No pains No gains.”（苦勞なくして得られるものはない）という言葉は、学習だけではなく全てのことに共通しています。苦勞するから悔しさがあり、苦勞しなければ何も得られない。私も生活の中で苦勞することを見つけようと思い、その一つが学習をすることに繋がりました。自分が一生懸命してきたことが結果に繋がらなかった時、とても苦しいです。しかし、結果に出なかったとしても、努力してきたこと自体に大切なことがあり、その苦しさが次のステップへの後押しになってくれます。私が学習やそれ以外のことを一生懸命する理由がそこにあります。また4組の皆は、LHRなどの学習時間に、静かに学習に取り組む姿があります。その雰囲気もまた、私に学習を促します。皆がやっているという良い意味のプレッシャーと、この雰囲気を壊してはいけないと言う緊張感があるからこそ、私も頑張らなくてはいけないと感ずることが出来ます。」（生徒M・Y）

この生徒に対して、古川は次のようにコメントした。「自ら進んで集団に奉仕できる人はまさに『百匹目の猿』（集団の中の最初の1人）で、本当にすばらしいと思います。しかし、そのすばらしさに「気づき」自分も見習いたいと「共鳴」できる人も本当にすばらしいと思います。仲間のすばらしさを認め、それに「共鳴」することのできる集団は、限りなく成長できるものと信じます。」（号外40号，2012）

5. 部活動・生徒会活動に現れた「気づき」と「共鳴」の事例

「姫百合」の影響は部活動や生徒会活動にも表れている。次に3つの事例を紹介する。先ず第1は、弓道部の部活動において生徒が顧問である古川から学んだ事例である。

「正直な所、2年生の9月の新人戦までは、弓道部の男子は、弓道で勝ちさえすればいい、的に当たりさえすればいい、という考えでした。そのため先生が部員に配布して下さった、行射の細かな注意点を記した「行射の要点」をおろそかにしていました。その結果は直ぐに9月の新人戦で出ました。県大会で風越高校男子Aチームは簡単に敗れてしまい、悔しい思いをしました。その時古川先生は、「やるべきことをやらなければ負ける、やるかどうかは本人次第」と言われ、その時初めて気づくことができました。僕は「弓道だけでなく、それより前の根本的な考え方や生活から変えなければ勝つことはできない」と思いました。僕だけでなく、弓道部男子全員がそれを感じたと思います。それから僕たちは、まず男子全員で話し合いを持ち、明確な目標を立てました。目標はもちろん「全国大会出場」でした。そのためにどうすればよいのかを話し合っ、それぞれが心掛けるように努力しました。弓道部としての自覚を持って、生活態度や服装から見直し、挨拶や周りの支えてくれる人への感謝の気持ちなどを持って学校生活を送るようにしました。また、古川忠司先生のお宅にある「志誠館弓道場」で月に1度行われる月例会に参加して、もっと先生の技術を学び、弓道の上達を目指しました。冬が明け、本格的な大会シーズンになると、出場する大会で風越高校男子は、常に上位入賞するほど強くなりました。5月の南信総体では、県大会の出場を手にし、個人でも県大会出場者を出すことができ、全国大会出場はより近いものになりました。国体選手にも仲間が選出されました。そして迎えた県大会ではベスト8に入り、決勝トーナメントに進んで、全国まであと少しでした。決勝トーナメント1回戦、大町高校と20射15中の同中と健闘したのですが、各チーム1本ずつの射詰め競射で、4中対2中で敗れて全国大会出場を逸してしまいました。敗因は技術差ではなく各人の心の弱さにあったと思います。この文章を書くことで、自分を見つめ直すことができました。残りの高校生活では、部活動を通して古川忠司先生に教えて頂いたことを心掛けて進路に向かって努力したいと思います。この文章を書く機会を頂いたことに感謝します。弓道部男子が新人戦から変わり強くなることのできたのは古川先生のお陰です。本当に有り難うございました。」(生徒H・T)

第2は、部活動の会計の仕事を通して提出物の期限厳守を学んだという事例である。

「私は昔から提出物の期限を守らない方ではなかったけれど、高校に入ってから改めて提出物の期限を守ることは大切だと思いました。それは、自分が提出物を集める側の先生の立場に立った時に、クラス全員分の進路や模試の希望などの内容をパソコンに入力したり、お金などを集めて膨大なお金を数え管理しなくてはならないと思ったら、とても大変だなあと思いました。実際に先生はいつもクラスの皆の進路の事を入力し、模試などのお金の勘定をして大変そうです。そういう時に期限を守らない人が居たりすると、嫌な思いをします。私も部活で会計をやっていたので、お金を管理する時の責任の重さは身に染みて感じました。私は先生の大変そうな姿や自分の会計をやっていた時の経験から、提出物の期限を

守らなければならないようになりました。これから模試などが多くなり、進路に関わる重要な提出物があると思うので、期限をしっかりと守っていきたいです。」（生徒H・K）

この記述をした生徒に古川は、次のようにコメントした。「自分の経験から相手の立場を思いやれる気遣いはすばらしいと思います。このように考えてくれる人が1人でも居てくれると、本当に心が癒されます。」（号外63号, 2012）

第3は、生徒会長が仲間に支えられていることに感謝している事例である。

「僕が生徒会長になる前、よく集会などで整列する時に、ルーム長と協力して皆を並ばせていました。2人掛かりでやっとなんでくれるような感じだったので、生徒会長になって協力できないことも多くなり、正直うまく並んでくれるか心配でした。しかし、ルーム長のR・K君を見るとM・S君やH・T君も協力してくれて、僕がいなくても大丈夫だと思いました。この他に、生徒会でクラスから抜けなければいけない時など、そのことを担任の先生に伝えてくれたり、配布物を手伝ってくれるR・K君のような仲間がいてくれてとても助かっています。気がつくとも、知らず知らずのうちに「クラスは大丈夫かな？」と言う思いは、無くなっていました。それはやはり、クラスを支えてくれる仲間がいるからだと思います。安心してクラスを任せられるメンバーが多く、僕も会長の仕事に打ち込めます。これからも、頼りになる仲間に助けられることが多くあると思いますが、彼らならきっとやってくれると信じています。すばらしい仲間にも困られているなあと実感します。」（生徒T・O）

6. 生徒と生徒、教師と生徒の人間関係において現れた「気づき」と「共鳴」の事例

「姫百合」が媒介となって、生徒と生徒、教師と生徒の心と心が触れ合い、「共鳴」が生まれている事例を4つ紹介する。第1は、生徒が「姫百合」を通して担任の危惧に気づいた事例である。

「古川忠司先生は1年の時からずっと学級通信「姫百合」を書いてくれています。今まで私は、興味のある分野のことしか読むことはありませんでした。ある日「姫百合」が棄てられていたことがあり、古川先生が激怒し、休日学校へ来て「姫百合」を一生懸命書いていることをみんなに話しました。その時、全て私たちのためにしてくれているのだということに改めて実感しました。私たちは偶然風越高校に入学し、古川先生も偶然私たちの担任になっただけなのに、私たちにそこまでしてくれるのかと感謝の気持ちでいっぱいになりました。それからは、難しい言葉も多く、よく分からないこともありますが、毎日しっかり読むようにしています。「姫百合」が棄てられているという事件がきっかけでしたが、「姫百合」の有りがたさというか、先生の心遣いを改めて知りました。これからも1つ1つしっかり読んでいきたいです。特に「姫百合」352号（2011）「担任の危惧すること」では、普段の生活のルーズさについて書かれていました。私も今までは、提出物を遅れて出したり、スカートを短くしてしまったり、遅刻をしてしまうことがありました。しかし、この「姫百合」352号（2012）を読んでみて、自分の無責任さが周りの人に迷惑をかけているのだと改めて反省しました。クラス39人がそれぞれ勝手なことをしていたら、全くまとまりのないクラスに

なって、協調性もなくなってしまいます。また、後々の受験にまで自分の生活態度が出てしまい、志望校に合格できなくなってしまいます。これは凄く悲しいことなので気をつけようと思い、遅刻もなくなり、提出物の期限も守り、スカートなどの服装にも気をつけるように努力しました。遂に3年生になったので、今まで以上に自らの行動に気を配って生活していきたいです。」（生徒Y・S）

この生徒に対して、古川は次のようにコメントした。「学校生活を乱している人は、自分だけではないと自分の間違った行動を正当化する傾向があります。しかし、Y・Sさんのように周囲に迷惑をかけていると気づけたり、N・Sさんのように友人のすばらしさに気づいて共鳴した行動を取れることで人は変わっていきけるのだと思います。すばらしい意見を有り難う。」（号外41号, 2012）

第2は、まさかの友は真の友を実感した事例である。

「「姫百合」348号（2011）の「スーパーホテル」を読んで、とても安い値段で宿泊できるのに、様々な点でお客さんに対するサービスが行き届いていて、リピーターになる人が大勢いることに驚きました。そして掃除のことで同じように、多くの生徒に気を配り、みんなが気づかない所までしっかり掃除したいと思い、小さなホコリまで片づけられるようになりました。小中学校と「無言清掃」が学校目標だったので、清掃には真面目に取り組んできましたが、「マニュアル通りに「ここをやる」と言われた所しかやらない」ことが多かったように思います。「自問清掃」を知ってから、「気働き」によって、自ら進んで汚れた所を探して歩くほどなっていると思います。そうして場所を磨くのではなく、自分の心を磨けたらと思います。「気づき」を広げるには、まずは自分の仲の良い友だちとその気持ちを共有し、その友だちからまた他の人というようにどんどん「気づき」が広がっていけばと思います。一人ひとりが意識して動くことが大切だと思います。「姫百合」259号（2011）の「親友とは？」を読んで、「まさかの友は真の友」と書いてあったように、自分が困っている時にさりげなく手助けしてくれる仲間こそが本当の友だちなんだと感じました。ルーム長のR・K君や黒板を自発的に消してくれているR・K君は、自分も忙しいのに僕が頼むと快く引き受けてくれます。僕の立場を理解してくれているからこそなのだと感謝しています。これからもこうした「真の友」と協力して頑張っていきたいと思います。」（生徒T・O）

第3は、「姫百合」を読みあうクラスの仲間の影響が一番大きいという事例である。

「私は、SHRの5分前行動を意識するようになりました。もちろん「姫百合」の中に書かれている内容の数々にも影響を受けましたが、1番は、クラスの仲間の影響です。意識するようになったと言っても、SHRの開始時刻ギリギリに行くこともまだあります。その時いつもクラスの仲間は、整然と自分の席について、「姫百合」を読み、「自分に問う活動」をしているので、次からはきちんと5分前に来ようという気持ちになります。もし自分が遅刻した時に、他の仲間も自分と同じように遅刻したりしていれば、次からも遅刻して良いような気持ちになって、毎日同じことを繰り返してしまうと思います。そういった悪い習慣ではなく、良い習慣が身に付いたのは、毎日一緒に「姫百合」を読んで真面目な生活をしている友

だちのお陰だと感謝しています。」（生徒 N・S）

第4は、「姫百合」を読み「狭き門」から入る生き方を学んだ生徒の事例である。

「「姫百合」92号（2010）の「塩狩峠」を読んで、自己犠牲と永遠性について学ぶことができました。この「姫百合」には、旅客列車の連結器が外れ、客車が暴走してしまったのを、長野政雄という実在の国鉄職員の方をモデルにした登場人物が身を挺して止め、大勢の乗客の命を助けたと書かれていて、「一人の人間の一生は短いけれど、人の心に刻まれた善行は、一生消えるものではない」、これが「狭き門」から入ることだと書かれています。自分の命を省みず、乗客の命を助けた長野さんの行為に心を打たれました。同様にクラスを見ると、S・H君は毎週欠かさず英語のテストを5分前から始めてくれ、R・K君は自発的に黒板消しをしてくれ、M・S君は自発的にゴミ捨てをしてくれています。自分の予習とか他に色々やりたいことがあると思うのに、自分の時間を割いて人のために活動している3人の姿に、とても刺激を受けました。彼らの行動こそが、「自己犠牲と永遠性」であり、力を尽くして「狭き門」より入ることだと気づきました。彼らの姿を見て、自分も自発的な行動をしなければと思うようになりました。これからも自分を見つめ直して過ごしていきたいです。」（生徒 H・O）

第5は、「姫百合」がもたらした先生と生徒の「共鳴」に感謝している事例である。

「3年4組の生徒として卒業する私の高校生活3年間は、今振り返ると、とても多くの「共鳴」をしてきた時間であったように感じます。中学校時代のクセだった授業中の居眠りは、1年生の時に隣の席だったM・Hさんの真面目な授業への取り組みに合わせていくうちに少しずつ無くなり、手抜き気味だった清掃への取り組みは同じ班の人たちの隅々まできちんと清掃する姿勢に合わせていくうちに真面目に取り組めるようになりました。いつも人に頼ってばかりだった日々の予定の確認などは、しっかりしているS・Iさん・K・Gさんたちと一緒に行動しているうちに自然とできるようになりました。他にも数え切れない位の「共鳴」をクラス全員から貰いました。他のクラスの友だちによく「4組は真面目だよ」と言われることがあります。それはつまり私だけではなく、クラスのみんな1人1人が、何かしらの「共鳴」を受けているということだと思います。そして、そんな4組のみんなを良い方へ導いてくれる架け橋を作って下さったのは、みんなの力だけではなく、古川先生の日々の私たちに対する真摯な向き合い方、毎日の「姫百合」の結果だと思います。私は、「姫百合 203号」（2011）「我が為す事は、我のみぞ知る」という言葉に、とても大きな勇気を貰いました。それまでは、親には迷惑がかからず、友だちにも影響を受けないで、当たり障り無い進路を探そうと思っていました。今思うと相当中身のない人間だったと思います。ですが、「姫百合」203号（2011）を読んでからは、もっと自分の人生というものを真剣に見つめ直そうと思い、今では教師になりたいという「夢」を見つけることができました。「我が為す事は、我のみぞ知る」という言葉を残した坂本龍馬もちろん大変凄いです。この言葉を知った時に、そのことについてより深めて調べ、何時間もかけて私たちのために「姫百合」を作って下さった古川忠司先生も大変すばらしい「共鳴」の心を持った方なのだと思います。

そのような素敵なお友だちや先生に恵まれた私は本当に幸せです。」（生徒H・M）

7. 考察

7.1 生徒の「気づき」や「共鳴」の端緒と教師の橋渡し

「自問清掃」は、掃除を通して自らの行為の妥当性を自らに問う「修行」の実践にはかならない。そのため筆者は生徒集団において最初の「行」を実践する生徒をいち早く発見することに努め、その行為の重要性を集団に広める橋渡しをすることを目指している。生徒の自由作文から考察すると、友人や両親や教師の姿などの「環境」と、係活動などの本人の「経験」が、「気づき」に大きく影響していると思う。従って、「気づき」の発露は、「幼少期の親の愛情と躰」による所が大きいと考えられる。学校教育において「百匹目の猿」を育てるには、その「環境」と「経験」をどう連携させるかが課題となる。その場合、性善説を唱える孟子の言う「四端の心」（「四徳」の芽生えとなる心）の中の「惻隠の心」（他者の不幸を見逃さない心）・「羞惡の心」（自分の不善を恥じる心）に訴えて、「気づき」を想起させる必要がある。

7.2 生徒の目線に立った「純粋さ」と「慎重さ」、そして迷いのない「信念」

教師は、生徒相互の「認め合い」、社会や周囲への「感謝」の橋渡しをすることが大切で、そのために教師自らも生徒の「気づき」や「共鳴」の端緒を見逃さない注意深い観察と教師自身の「共鳴」が必要であると確信できた。しかし、多感でややもすると消極的な高校生に対して、良いと思うことを一刻も早く始めた「自ら先行するマイノリティ」、つまり「百匹の猿の中の一匹」の生徒の行動をどのように自覚させ、またどのように集団に紹介して「共鳴」を導き出すかが問題であった。教師自らの注意深い観察と教師自身の「共鳴」は、自らの努力で身につけることはできても、生徒の自覚と集団へ紹介することへの同意を得ることは、慎重な配慮を要し、教師の早急な行動は、「百匹目の猿」の貴い行動の芽を摘むことになりかねない。但し一度「百匹目の猿」の目覚めを導くことができれば、「共鳴」は高校生の純粋さ・多感さが後押しして、砂に水がしみこむが如くに瞬く間に広がりを見せる。この場合も、共感のサインを見逃さず、その「気づき」のすばらしさと重要性を紹介することが大切である。そうした時に、学級通信「姫百合」が単なる連絡の手段ではなく、生徒と保護者と教師の「共感＝共鳴」の場になっていたことが「共鳴＝拡大」を可能にしたと生徒の自由作文から実証できたと考えられる。従って、信念を持って地道に「姫百合」を発行し続けたことがこの生徒指導実践の鍵であった。そこで教師は、生徒の目線にたった「純粋さ」で、自らの理想に対する迷いのない「信念」を持ち、生徒の立場に立つ「慎重さ」を持って日々の教育に当たることが課題となると考える。それはまさに実存主義のニーチェが唱える「超人」（既存の秩序や価値に囚われずに自己存在を認識する）の「ラクダの忍耐力・獅子の強さ・小児の純粋さ」に類似するものであると思う。そしてスタートは、「まず友の素晴らしさに気づき、それを認めることができる」ことであり、そのことに「共鳴」するには、「気づきが刺激となって、生徒自身が自らの生活を見返すことができる」こと、更に「あなたの笑顔が、私の幸せ」と思えるようになることが必要であると考えられる。そのプロセスを教師が理解し、教育活動に活かしていくことが教師の最大

の課題であると考え。最後に筆者の思いに「共鳴」して、学級活動や部活動に尽力してくれた生徒・保護者の皆様に心から感謝し、自らも更なる向上を目指して努力していきたい。

注

- 1) 「姫百合」1号～202号, 号外1号～25号(2010-2011)は, 飯田風越高校1年4組で発行した学級通信である。203号～403号, 号外26号～35号(2011-2012)は同校2年4組で発行し, 404号～580号, 号外36号～73号(2012-2013)は, 同校3年4組で発行した。「姫百合」を活用した実践報告には次の事例がある。古川忠司・土井 進(2012)「学級通信『姫百合』による高校生のキャリア教育」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第13号, pp. 127-136
- 2) 竹内隆夫(1991)『自問活動のすすめ』第一法規出版。「自問清掃」の実践報告には次のような事例がある。古川忠司・鎌倉正之・川根一仁・土井 進(2002)「松川中学校における「自問清掃」の導入と展開(1)」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第1号 pp. 163-172, 古川忠司・鎌倉正之・川根一仁・長沼正博・土井 進(2003)「松川中学校における「自問清掃」の導入と展開(2)」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第2号, pp. 143-152。最新の「自問清掃」に関する著書・研究論文として次の2つを挙げるができる。平田治(2012)『学校清掃と教師成長—自問清掃の可能性—』一莖書房。平田治・土井進(2013)『学校掃除「自問清掃」の発想原理と方法的原理』, 信州大学教育学部研究論集, 第6号, pp. 37-50
- 3) 船井幸雄(1996)『百匹目の猿—「思い」が世界を変える』サンマーク出版, p. 27

(2013年11月14日 受付)

(2014年 2月13日 受理)